

Title	「社会学のなかの日記」と「日記の社会学」
Author	近藤, 泰裕
Citation	市大社会学. 3 卷, p.17-26.
Issue Date	2002-03
ISSN	1345-8019
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学社会学研究会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

「社会学のなかの日記」と「日記の社会学」

近藤 泰裕

1. はじめに

近年、諸般の事情によりその公刊が難しいとされてきた近代の作家や芸術家たちの日記が続々と出版され、日本の読書界に時ならぬ静かなブームを招来しているという [紀田 1995: 295]。またそれと前後して、1980年代の後半から日本ならびにヨーロッパ各国の近現代の日記を対象とするさまざまなタイプの研究書も相次いで刊行されるようになってきた(たとえば [Didier 1976=1987]、[Hocke 1991]、[鴨下 1999]、[紀田 1995]、[大島 1998])。これまでそのほとんどがいわゆる日記文学の研究、すなわち古典文学や著名な作家の日記を素材とする作品論や解釈にかぎられていた日記研究は、ひとつの大きな転換点にさしかかっている。

もちろん、これまでの社会学的研究も日記の存在をまったく無視してきたというわけではない。しかしながら、それに言及する研究者の多くが指摘するように、日記を中心的に取り扱う研究の蓄積数は思いのほか少なく、その利用法についての方法論的議論も充分にはなされてこなかった ([Denzin 1970→1989]、[古屋野・青木 1995]、[plummer 1983])。

それがここ数年、上述した日記への関心の高まりを反映してか、社会学の領域においても、これまでにない新しいタイプの日記分析が生まれつつある。そこで本稿では、そうした近年の動向を含む先行研究の紹介・整理をおこない、社会学的日記研究のもつ可能性について考えてみることにしたい。

ところで、そもそも日記とは一体どのようなものなのであろうか。日記の書き方にこれといったルールのようなものはない。ゆえにそれをどう書くか、何を書くかはまさに人それぞれである。あえて最大公約数的な定義づけをおこなうならば、B・ディディエがいうように、「特定の日付けが記された書き物」ということになるであろう [Didier 1976=1987: 218]。

2. 記録としての日記

社会学的研究にとって、日記とはまず第一に記録、自伝や手紙などと並ぶ個人的記録 (personal document) [Allport 1942]、生活記録 (life document) [Plummer 1983] のひとつである。そこでこの最初の節では、そうした観点に立つ先行研究から内容の紹介と検討をはじめることにする。

a. 生活史研究によるアプローチ

日記を中心的に取り扱う先行研究の大半を占めるのが、生活史の研究者たちによるものである。ここでは、日記はある特定の時代における、特定の社会（学）的カテゴリーの成員である個人の日々の生活、そこで抱いた感情等の記録とされる。

生活史研究における日記分析の代表例としては、自身の十代、二十代の日記、さらにはその母親の日記を資料とする中野卓の一連の著作〔中野 1981, 1989, 1992〕、愛知県の高等小学校教員石川一の日記を用いた石川辰彦の考察〔石川 1981〕、さらには石川県金沢市の象嵌細工職人・米沢弘安の日記を対象とした古屋野正伍・青木秀男の分析〔古屋野・青木 1995〕をあげることができる。これらの諸研究は、日記と各種の統計的資料とを相互補完的に活用することにより、さまざまな人々の生活の諸相を具体的かつ詳細に描き出している。

「記録」としての日記が備える特性について、中野は次のように述べている。

研究対象者たる本人が自分で書きとめたものである日記は、本人やその周辺で生きた人々の生活の事実や考えや感情に我々が生々しく接しうる資料である。……日記においては、年月を経て後に回想する場合とは違って、毎日の出来事を日ごとに回想し、そのつど、記載事項の選択や自己解釈がなされているだけに、忘却やそのための短絡も、正当化や劇的再構成など、いかなる後日の作爲的修正もなしに、記事は日々の生活のひだをいきいきと露呈している。思いつめた興奮も、平静化も、小さな反省も、評価も、一寸した淡い感懐も、そのつど、文字になって記録されている。

〔中野 1981: 225, 230〕

人はさまざまな動機・理由から日記を書きつづる。そして、何かのきっかけで研究者がそれに出会い、分析の対象として取りあげることによって、一つの日記は記録、あるいは資料となる。研究対象者自らが書き記したものである点、これが「記録」としての日記が有する第一の特性である。

もう一つの特性は、当人が日々の生活で経験するさまざまな出来事、抱いた感情の数々が、あまり時間を置くことなくそこに記されることにある〔Denzin 1989: 193〕。日記とは、——しばらくたてばそれを書いた当人でさえも忘れてしまうような——日常生活の断片、そこで抱いたさまざまな思いがつづられた記録であり、ひとつの歴史的証言ともなりうるものである。

「書き手の生活体験は、日記の中で、書き手の関心に基づいて脚色される」という古屋野と青木の指摘からもあきらかなように〔古屋野・青木 1995: 67〕、日記を「ありのままの」生活記録とみなすことはできない。思い込みから生じる勘違いが記されることは充分おこりうるし、中野が否定する正当化の意志がそこに入り込むことも時にはあるだろう。しかしながら、それによって記録としての日記の価値がそこなわれるということにはならない。むしろ、そうした脚色をも含んだ書き手自身の社会生活への意味づけ、その人なりの主観的世界が記されている点こそが、日記のもつ重要な価値であるといえよう。

いうまでもなく、すべての人が日記を書くわけではない。また、日記を書いた当人はもちろん、そこに登場する人々のプライバシーへの配慮から、その公表がためらわれる場合も少なくはない。それが備える特性が賞賛される反面、日記はその入手・利用が困難な資料でもある。生活史研究が活況を

呈し、方法論的洗練もすすむなかで、日記分析の蓄積が思いのほかなされていない根本的要因はここにあると考えられる。

とはいえ、利用可能な日記との幸運な出会いを待つほかに方法がないというわけではない。D.H. ジンマーマンと D.L. ウィーダーが試みたように [Zimmerman & Wieder 1977]、調査過程の一環として、研究対象者に日記の執筆を依頼するというやりかたもある。

対抗文化 (counter-culture) の担い手である若者たちの生活様式に関する研究を準備するなかで、当初二人は参与観察法を用いるつもりであった。しかしながら、研究対象者との年齢差、さらには生活時間帯の相違などにより、その採用は困難であることがあきらかになった。

そこで二人は、新たな方法として「日記一面接法 diary-interview method」を考案した。この手法は、まず調査対象者に一週間に渡る時系列的な活動（「いつ」、「どこで」、「だれと」、「何をした」等々）の記録（日記 log）を書いてもらい、後日それに基づいた詳細な面接調査をおこなうというものである¹⁾。

日記の執筆者やその家族に対する聴き取り調査は中野や古屋野・青木の分析でも導入されているが（〔中野 1981: (はじめに) 7〕、〔古屋野・青木 1995: 66〕）、それらは資料としての日記をより正確なものにするためにおこなわれたものである。それに対して、ジンマーマンとウィーダーの考察における主眼は、むしろインタビュー調査の方にあり、日記はあくまでそのための資料と位置づけられている。したがってそれは、日記分析のいわば特殊な一形式ではあるが、それまでにない日記の活用法を提示したという意味で、貴重な分析であるといえるであろう。

b. その他のアプローチ

日記を一つの記録と考える研究には、もう一つのタイプとして、議論の一般化の度合い、抽象度のより高いものがある。ここでは、日記は既存の研究領域、テーマについての分析、考察における例証の資料として用いられる。このタイプの研究には、『ユキの日記』（1978 笠原嘉編 みすず書房）を分析の素材、対象とした桐田克利、加藤春恵子によるものがある（〔桐田 1993〕、〔加藤 1986〕）。

桐田は『ユキの日記』を人がその社会生活において直面する「生きられた経験」のひとつである対人的苦悩、なかでも本人が強く意識する孤独感に由来する苦悩をつづった記録、その典型的な代表例の一つとみなす。そして、記された内容をもとに、日記の主人公がそうした苦悩を経験するに至った理由、背景、さらにはそれを克服できなかった要因を「病床生活」、「対人関係」というふたつのキーワードを軸に考察している。

いっぽう加藤は、『ユキの日記』を人が自他との関わり方の原型をまなぶところである家族という空間内部における相互作用、さらにそれらを通して形成される人間関係の観察の記録ととらえる。そして、それらが日記の主人公の自己意識の形成過程に及ぼした影響について分析している。また、加藤の考察はコミュニケーション論を土台にしたものであるが、そこからさらに女性論、日本人論にまで及んでいる。

『ユキの日記』を対象とする先行研究には、さらにもう一つ水野節夫によるものがある〔水野 2000〕。水野は自身の提唱する「個人学」、すなわち「研究の焦点を具体的な個人におきながらその個人のありように可能なかぎり肉薄していこうとする研究」〔水野 2000: 269〕への事例媒介的アプローチのひとつとして『ユキの日記』を分析している。さきの二人と同様に、水野の分析も日記の主人公の生活世界、それに対する本人の意味づけに焦点をあわせたものであるが、単一の事例にもとづく議

論の一般化については否定的な見解を示している〔水野 2000: 333〕。

この節では、「記録」としての日記に注目した先行研究についてみてきた。生活史研究による分析は、年齢、性別、あるいは従事する職業といった要素にもとづいて、日記の作者をある特定のカテゴリーに分類することを議論の出発点にしている。人はその生涯を通じてさまざまなカテゴリー間の移動をおこなうし、また同時に複数のカテゴリーに属する場合もある〔水野 1986: 188-189〕。したがって、ある一つの日記を全く別のカテゴリーの成員が書いたものとして分析することも当然可能である。

また、『ユキの日記』をめぐる三人の分析が示すように、同じひとつの日記を資料に用いる場合でも、それには多様な考察・解釈の方法があり得る。

3. コミュニケーションとしての日記記述

コンピューターゲームに親しむ現代日本の若い世代にとっての快楽をテーマとする一文のなかで、高村薫は次のように述べている。

……今やゲーム世代の新しい個人は、他者の目を気にすることなく己の快楽や欲求を解き放っている。ただし、その成果は今のところ、たまに斬新ではあっても、往々にして生硬で、単純で、稚拙である。他者の目にさらされ、評価され、洗練されるという試練を受けない快楽は、せいぜい個人の日記の中に留めておく程度のクズだということが忘れられているためである。
〔高村 2000: 32-33〕

これは高村自身の作家としての矜持を示すと同時に、これまでにわたしたちが日記というものに対していってきたイメージをあらわす言葉でもあると考えられる。つまり、従来日記とは自分以外の人間には見せないことを前提にして書かれる、あくまで個人的、私的なものであるという考え方が一般的、支配的であったといえる。書き手が生きている間に発表される日記がわざわざ「生前出版」という別の呼び名を付されるのも、それがあまり一般的でない、特殊なことであると考えられてきたことのあらわれであろう。

わたしたちはふつう、人前で日記をつけることはない。よって日記を書くことそれ自体は、確かに個人的、私的な作業である。しかしながら、それは本当に単なる自己充足的、自己完結的なものにすぎないのであろうか。日記をめぐる研究の第二のタイプは、この点を問題にしたものである。

先述したように、社会調査の標準的なテキスト等において、日記は個人的記録、あるいは生活記録のひとつとして、私的な手紙とひとくくりによく言及されることが多い。日記と手紙を区別する最も大きな相違点として指摘できるのが、その宛先、宛名の有無である。

当たり前のことだが、手紙には特定の宛先、宛名がある。そしてそれは、手紙というものがそれを書く人から受け取る人に向けてなされる何らかの情報の伝達、つまりはコミュニケーションの一形態であることの証しである。それに対して、一般に日記の記述には特定の宛先や宛名といったものはない。それでは、人は誰に向けて日記を書くのか、さまざまな日記の読者とはいったい誰なのであろうか。

ある程度長い期間にわたって書き続けられた日記には、時おり過去の日記を読み返す書き手自身の姿が記されていることがある(たとえば〔Malinowski 1967=1987: 234, 362〕,〔古川 1988: 355, 430, 642〕)。このことから明らかなように、日記の読者とは、まず第一にそれを書く本人である。備忘録や覚え

書きと同じように、人は未来の自分のために、それに向けて日記を書く。しかしそれだけではない。

日記の宛先とはどこなのか、つまりそれは誰に向けて書かれるものなのか。この点にふれた先行研究に葛山泰央の分析〔葛山 1999, 2000〕がある。数ある日記のなかで葛山は 18、19 世紀のフランスにおける日記的な書記(行為)、中でも 18 世紀の後半から姿を現しはじめた「内的日記 journal intimate」、すなわち「人が自身を取り巻く諸関係、そこで自身の振る舞いを、自分自身の『内面性』との関連において書き記そうとする日記」に着目し、考察の対象にとりあげる。

その第一の読者として書き手自身があげられるように、日記は個室的な空間において書き記される、私的な性格を帯びたものであると考えられることが多い。しかしながら、葛山によれば、それらは決して自己完結的な営為ではなく、自身の「内面的な打ち明け話」に耳を傾けてくれる読者との間に親密な空間、共同体の創出をめざしてなされるある種の運動であるという。

アンネ・フランクの『アンネの日記』は、想像上の友人キティーに宛てた手紙という形でつづられた日記である。それと同様に、葛山のいう読者とは、実在する特定の人物ではなく、日記の作者が想像の次元においてその存在を仮定する人物である⁽²⁾。このように、日記にはその書き手が想定する親密な他者という第二の読者も存在すると考えられる。

日記はある個人によって書かれ、私有されるのが大半である。しかし中には、交換日記のように複数の人々によって交互に書かれ、共有されるものもある⁽³⁾。この場合、書き手は未来の自分や想像上の読者だけでなく、それを交換する特定の相手、あるいは仲間に向けても日記をつづることになる。

またさらに、日記にはマスメディア等を通じてより多くの読者に向けて出版・公開されるものがある。もともと、これまでこの種の日記の書き手は、多数の読者の獲得が予想される著名な作家や政治家、あるいは芸術家といった一部の人たちに限られていた。ところが近年、そうした従来のイメージを覆す新しいタイプの公開日記が登場した。それがインターネットのホームページ上で公開される日記、いわゆるウェブ(Web)日記である⁽⁴⁾。このウェブ日記には検索機能をそなえた登録制のリンク集もあり、1996年に米国在住の池川哲夫と遠藤泰広が開始した「日記才人」(旧「日記猿人」)には、2002年2月現在実に約17000もの日記が登録(累計数)されている。

交換日記の場合、その読者は基本的に交換のネットワークへの参加者、せいぜい多くてもその周辺にいる人々のみに限定される。それに対して、出版・公開される日記は、それを書いた本人の意志はともかく、結果的に不特定多数の読者を獲得することになる。とりわけ書き手の生前に出版・公開される日記は、あきらかに自分以外の読者の存在を想定、考慮した上で記されることになるであろう。

この節では、「人は誰に向けて日記を書くのか」という問いについて考えてきた。日記には「公開されるもの」と「公開されないもの」との二種類がある。そして、日記の公開のしかたには、交換日記のように特定の読者に対するものと、出版される日記やウェブ日記のように不特定多数の読者に対するものとの二通りがある。また、実際には公開されない日記についても、葛山が指摘するように、「想像上の読者」に向けて書かれる場合があると考えられる。

このように、日記は 1. それを書く人自身、2. 特定の他者、3. 不特定多数の他者、4. 想像上の他者というさまざまなタイプの読者に向けて、その存在を想定したうえで書かれるものである。よってそれをつづる行為は、単なる自己完結的な営為のみにとどまるものではなく、コミュニケーションの一形態でもありと考えることができる。

もちろん、そこに書かれた内容、あるいは作者が込めた思い等をどのように受け止めるかは、それを手にする読者次第である。作家のジュリアン・グリーンがある講演の場で述べたように〔Green 1982

: 63]、日記とは「見知らぬ人々に宛てた手紙のようなもの」だといえるだろう。

4. 文化・社会現象としての日記

前節では、「人は誰に向けて日記を書くのか」という問いのもと、日記を書くという営為が内包するコミュニケーション的特性について検討をおこなった。続いてこの節では、さらに広い視点から、日記のもつ歴史的側面に着目した研究についてみていくことにしたい。

個人的な日記をつける理由はさまざまであろう。「普通の」('ordinary') 人の場合、毎日何があったかを記録するのは楽しいことかも知れない。こうすると、将来のある時点で、すぎ去ったときを振り返り、追憶にふける時間を持つことができる。おそらく、今日この種の日記をつけるのは大変珍しいことであろう。……「普通の」人にとって、毎日の出来事を詳細に日記につけるのは、おそらくちょっと風変わりで、場合によっては自己中心的だとさえ見なされることになるだろう。

[Mann 1968: 67]

ピーター・マンがこのように述べたのは 1968 年のことである。しかしながら、それから 30 年以上が経過した今日でも、——その実数を特定するのは容易ではないが——さまざまな「普通の」人々が日記を書き続けている。多くのひとたちが、長い間にわたって成し遂げてきた営為であるという意味で、日記は一つの社会現象、あるいは文化であるといえよう。

この点に着目したものに、日記を「自己の日常をつづる生活文化」のひとつと位置づけ、1980 年代後半以降その執筆や出版が急速に広まりつつある「自分史」とともに、その成立と変遷の過程を考察した小林多寿子の分析 ([小林 1998, 1999, 2000]) がある。その中で小林は、数多くの人々のあいだに日記を書く習慣が広まるに至った社会的背景、さらにはその一般的な形式、つまりはその書き方についての標準的なスタイルが形成された要因をさぐっている。

日記を書くという文化的実践の成立、日常化に不可欠な前提条件として小林が指摘するのが、いわゆるリテラシー、すなわち読み書き能力の普及である。口述筆記による執筆というケースも考えられなくはないが、基本的に日記をつづることは個人的な作業である。したがって、それが一般的なものになるためには、多くの人々が文字を読み、書く能力、習慣を身につけることが必要となる。日本の社会に小学校教育が普及したのは、明治時代中期である。それにより文字を習得する人々が増え、文章を書く習慣が少しずつ浸透、定着していったものと推測できる。ゆえにこの時期、つまりは 1890 年代が日本における近代的な日記の誕生期にあたるものと考えられる。

そこに何を書くかが人それぞれであるように、日記を何に書き記すかはさまざまであるが、日記帳を用いることも多いであろう。明治中期は、様式化され、市販された日記の先駆けである博文館の「懐中日記」が登場した時期でもある。この日記は、当時の博文館社主・大橋佐平によってその製作販売が考案されたものである。それは大橋が明治 26 年 (1893 年) 3 月から 11 月にかけて欧米各国を歴訪したさい、人々が小さな手帳を携帯し、日常生活を管理する手段、あるいは備忘録として利用するのに気づいたことがきっかけであった。またそれは、文字を書く習慣の普及を意図したのもであり、明治新政府とは別の形で、在野から日本の近代化をめざす試みのひとつであった [坪内 1993]。

博文館日記は今日でも多くのひとびとに親しまれており、現在では一冊数百円から約一万円まで、色や装丁のバリエーションを含めると約百種類ものタイプが販売されている。商品化されている日記には、ほぼ共通して、日付けや曜日、天候を記す欄がもうけられている。小林が指摘するように[小林 1998: 220]、市販される日記の登場は、人々のあいだに日々の生活、そこでの経験を文章にする習慣を広めただけでなく、その実践に一定の様式化されたスタイルをももたらすことになったといえるだろう。

近代の日本社会に文章を書く習慣、文化が普及・定着した過程について語るうえで、忘れてはならないもうひとつのものに「生活綴り方運動」がある。この運動は、明治末期に教育者の芦田恵之助、雑誌『赤い鳥』を主宰した文学者の鈴木三重吉らによって始められた一つの教育運動、思想運動である。1930年代に入ると国分太郎ら農村地域の教師たちによって全国各地に広められ、戦後にはその「おとな版」ともいべき「生活記録運動」も誕生した⁽⁵⁾。

この生活綴り方運動の一環として、日本のさまざまな地域における初等教育の現場で、作文教育や日記の指導がおこなわれるようになった。日記の指導は、児童が書いた日記のひとつひとつに教師が何らかのコメントを加えるという形でおこなわれるのが一般的である⁽⁶⁾。したがってそれは、ある種の交換日記とも呼べるものであり、文章を書くことを奨励する啓蒙的な活動のみにとどまらない、児童と教師のあいだでなされる双方向的コミュニケーションの一形態でもあると考えられる。

教育実践のなかからうまれる日記は、教師が「書かせる日記」、つまり児童にとっては「書かされる日記」、ひとつの義務としての日記である。教えられた内容をどう受けとめるかは人それぞれである以上、その反動として大の日記嫌いになった児童も少なくはないであろう。とはいえ、日記指導が多くの子どもたちに日記というものの存在を知るきっかけ、さらにはそれを実際に書く機会をもたらしたことはまちがいない。その全国規模での実践は、日記を書くという社会習慣、文化の土台作り大きく貢献したといえるであろう。

前節で述べたように、人は日記を未来の自分自身だけでなく、さまざまな特定、不特定の読者に向けても書く。つまり日記とは、「書かれるもの」であると同時に「読まれるもの」でもある。先述したように、毎年数多くの日記が書物として出版されている。その中には永井荷風の『断腸亭日乗』、阿部次郎の『三太郎の日記』、さらには高野悦子の『二十歳の原点』、武田百合子の『富士日記』等々のように、ロング・セラー、あるいはベスト・セラーとして多数の読者を獲得した日記もある⁽⁷⁾。

また、『〇〇日記』と題する書物のなかには、ディディエが日記の最低要件として指摘した日付けの記載すら見られない身辺雑記やエッセイの類もある。これは日記が持つ自由度の高さ、さらにはそれがまとう意味の多様さを示す一例である。また見方を変えれば、タイトルに「日記」の文字を入れることがその本のヒットにつながると考えられていること、つまりそれだけ日記が出版物の一ジャンルとして定着、確立していることを示すものでもいえるだろう。

このように、わたしたちの社会には、日記を書く社会習慣、文化とともに、それを読む文化、習慣も確実に存在すると考えられる。それならば、ここで新たに「人は何のために、何を求めて日記を読むのか」という問いを立ててみることも可能であろう。この点について、漫画家のつげ義春は次のように述べている。

私は文学が好きでよく読むほうだが、作品ばかりでなく日記や年譜も熱心に読む。ときにはそれだけ読んで作品は読まないことすらある。日記や年譜を読むことによって、作品をよ

り深く理解するということはあるだろうけれど、私の場合はそうではなく、作家の私生活や境遇を知りたいために読んでいる。……何故作家の生活に興味を持つかという、私は人生経験も浅く、未熟で、生き方が下手で、いつも動揺しながら暗闇を手さぐりで進むように、辛うじて生きている。常に不安で心細く頼りない。そんなとき他人の生き方を見るのは参考になり、慰められ、勇気づけられるからである。

[つげ 1983: 243]

これはあくまで一つの意見にすぎないが、日記を読むという行為には、他人の私生活に対する好奇心をみたとのこと以外にも、さまざまな効用があるように思われる。

この節では、日記のもつ文化・社会現象としての側面についてみてきた。ここでは日本の近現代における日記文化の歴史の変遷を中心にとりあげたが、冒頭で述べたように、すでに欧米においても同様の研究がいくつかなされている。それらとの比較は、今後の重要な課題となるであろう。

5. おわりに

本稿では、日記にまつわる先行研究を三つのタイプに大別し、それぞれに固有の論点についてみてきた。第一のタイプに属する諸研究は、生活史研究、あるいは自己意識論といった既存の研究領域に日記を導入した、いうなれば「社会学のなかの日記分析」である。このタイプが分析の対象とするのは、すでに出来上がった完成品、記録としての日記であった。それに対して、日記を書くという行為そのもの、さらにはそれが社会に広まる歴史的過程を対象とする第二、第三のタイプは、より包括的な「日記の社会的分析」、その第一歩とよぶべきものであるといえよう。

日記とは、あくまで個人で楽しむもの、非公開を前提に書き記すものであるという考え方はいまだに根強い。新しいタイプの公開日記として登場したウェブ日記も、すべての人が実名を公表したうえでそれを書いているというわけではない。それがまとう私密的なイメージは、ほかの書き物にはない日記に固有の特性であり、魅力のひとつでもある反面、その大部分が人目にふれることなく、やがては失われていく要因ともなってきたと考えられる。

しかしながら、はじめに述べたように、ここ数年出版される日記の数は増加の傾向にあり、同時に書き手の多様化もすすんでいる。また、1996年に設立した「女性の日記から学ぶ会」（島利栄子代表、千葉県八千代市）のように、個人の日記の収集・発掘を目的に活動を続ける市民グループも誕生している⁽⁸⁾。

このように、日記研究をとりまく環境は、着実に、望ましい方向で整いつつある。もちろん、残された課題は多い。社会学のなかの日記分析、そして日記の社会的分析、いずれもまだまだ始まったばかりである。

[注]

(1) ちなみに、調査対象者には一人あたり10ドルの謝礼が支払われた [Zimmerman & Wieder 1977: 488]。

(2) 人が想像の次元においてその存在を仮定する人物、あるいは存在とのあいだでおこなうコミュニケーション

- ンが有する社会的機能については〔近藤 2001〕を参照。
- (3) 交換日記については本田和子による研究〔本田 1996〕がある。
- (4) ウェブ日記に関する萌芽的研究としては、社会心理学の立場から個人の心理的側面との関連を考察した川浦康生らの分析〔川浦・山下・川上 1999〕がある。また、ウェブ日記の歴史の変遷については〔黒岩 2000〕を参照。
- (5) 社会学の立場から生活綴り方運動、ならびに生活記録運動について言及したものとしては〔鶴見 1998〕を参照。
- (6) 日記指導の具体的な中身については〔亀村 1971, 1994〕、〔金城 1982〕をそれぞれ参照。
- (7) 最近では、南条あや『卒業式まで死にません—女子高生南条あやの日記』(2000 新潮社)のように、もともとウェブ日記として公表されたものが、後に出版されるというケースも増加しつつある。南条あやの日記については、高野悦子『二十歳の原点』と対比させた土井隆義による詳細な分析がある〔土井 2002〕。
- (8) 同会には、現在約 180 名の会員が全国から参加しており、寄贈や貸し出しを受けた日記の総数は 1300 冊以上にのぼるという〔読売新聞 2002 年 1 月 7 日号〕。

[文献]

- Allport, G.W. 1942 *The Use of Personal Documents in Psychological Science*. Social Science Research Council, Bulletin 49. (= 1970 大場安則訳『心理学における個人的記録の活用法』培風館)
- Denzin, N.K. (1970 → 1989) *The Research Act: A Theoretical Introduction to Sociological Method*, Prentice-Hall.
- Didier, B. 1976 *Le journal intime*, Press Universitaire de France. (= 1987 西川長夫・後平隆訳『日記論』松籟社)
- 土井隆義 2002 「生きづらさの系譜学 高野悦子と南条あや」 亀山佳明・富永茂樹・清水学編『文化社会学への招待——〈芸術〉から〈社会学〉へ』世界思想社 205-233 頁
- 古川ロッパ 1988 『古川ロッパ昭和日記・戦後篇 昭和 20 年～昭和 27 年』滝大作編 晶文社
- Green, J. 1982 「講演 日記をつけること」佐分純一訳『教養論叢』第 61 号 56-85 頁
- Hocke, G.R. 1991 *Europäische Tagebücher aus vier Jahrhunderten: Motive und Autobiologie*, Fischer Taschenbuch Verlag. (= 1991 石丸昭二ほか訳『ヨーロッパの日記 第 1 部』法政大学出版局)
- 本田和子 1996 『交換日記 少女たちの秘密のプレイランド』岩波書店
- 石川辰彦 1981 「大正・昭和期の教員生活史—石川一の事例を通して—」 石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教員社会史研究』亜紀書房 383-457 頁
- 亀村五郎 1971 『日記指導 生活綴り方教育叢書 実践方法篇 1』百合出版
- 1994 『日記の見方・書かせ方』百合出版
- 鴨下信一 1999 『面白すぎる日記たち：逆説的日本語読本』文春新書
- 加藤春恵子 1986 『広場のコミュニケーションへ』勁草書房
- 葛山泰央 1999 「内的日記の生成と展開——18-19 世紀フランスにおける内面性と社会性との交錯——」『ソシオロギス』23, 103-124 頁
- 2000 『友愛の歴史社会学』岩波書店
- 川浦康生・山下清美・川上善郎 1999 「人はなぜウェブ日記を書き続けるのか：コンピュータ・ネットワークにおける自己表現」『社会心理学研究』14(3), 133-143 頁

- 紀田順一郎 1995 『日記の虚実』 ちくま文庫
- 金城勝代 1982 『日記指導の実際』 溪水社
- 桐田克利 1993 『苦悩の社会学』 世界思想社
- 小林多寿子 1998 「自己をつづる文化—日記と自分史の誕生」 石川実・井上忠司編 『生活文化を学ぶために』 世界思想社 209-228頁
- 1999 「日記」 日本生活学会編 『生活学事典』 TBS プリタニカ 211-214頁
- 2000 「自己のメディアとしての日記—近代日記の成立」 『現代のエスプリ』 391. 73-83頁
- 近藤泰裕 2001 「内なる他者との相互作用——想像的相互作用とその社会的機能」 『市大社会学』 No.2 34-44頁
- 古屋野正伍・青木秀男 1995 「日記分析における『個人対歴史』の問題—金沢・象嵌細工職人の生活史研究のばあい—」 『人間科学論究』 3. 65-76頁
- 黒岩雅彦 2000 「サイバースペースと日記コミュニティ」 『現代のエスプリ』 391.181-195頁
- Malinowski,B. 1967 *A Diary in the Strict Sense of the Term*, Harcourt Brace & World. (= 1987 谷口桂子訳 『マリノフスキー日記』 平凡社)
- Mann,P.H. 1968 *Method of Sociological Enquiry*, Basil Blackwell. (= 1982 中野正大訳 『社会調査を学ぶ人のために』 世界思想社)
- 水野節夫 1986 「生活史研究とその多様な展開」 宮島喬編 『社会学の歴史的展開』 サイエンス社 149-208頁
- 2000 『事例分析への挑戦——'個人'現象への事例媒介的アプローチの試み——』 東信堂
- 中野 卓 (編) 1981 『明治四十三年京都 ある商家の若妻の日記』 新曜社
- (編・著) 1989 『中学生のみた昭和十年代』 新曜社
- 1992 『「学徒出陣」前後 ある従軍学生のみた戦争』 新曜社
- 大島一雄 1998 『人はなぜ日記を書くか』 芳賀書店
- Plummer,K. 1983 *Documents of Life*, George Allen & Unwin(= 1991 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳 『生活記録の社会学——方法としての生活史研究案内——』 光生館)
- 高村 薫 2000 『半眼訥訥』 文芸春秋社
- つげ義春 1983 『つげ義春日記』 講談社
- 鶴見和子 1998 『コレクション 鶴見和子曼荼羅Ⅱ 人の巻——日本人のライフ・ヒストリー』 藤原書店
- 坪内祐三 1993 「メディアとしての日記——博文館日記起源——」 『月刊 Asahi』 1993年1月号
- Zimmerman,D.H. & Wieder,D.L. 1977 'The Diary: Diary-Interview Method', *Urban Life*, Vol. 5 No.4, 479-498.

こんどう やすひろ (大阪市立大学大学院後期博士課程)